

**司会** 申し遅れました。本日司会を務めます私立中村中学校・高等学校、江藤健と申します。どうぞよろしくお願いいたします。(拍手)

続きまして、講演になります。明治大学文学部准教授、伊藤直樹先生より「子どもの心の読みとき方 ～スクールカウンセリングと特別支援教育の視点から～」と題しましてご講演をいただきます。それでは伊藤先生、どうぞよろしくお願いいたします。

## 講演

### 「子どもの心の読みとき方

### ～スクールカウンセリングと特別支援教育の視点から～」

伊藤直樹 明治大学文学部准教授

**伊藤** ただいまご紹介いただきました明治大学の伊藤と申します。カウンセリング関係のことを教職課程で教えております。どうぞよろしくお願いいたします。

事務局の方からこういった研究大会のお話をご紹介いただきまして、講演をお願いしたいということで、なかなか断るのが苦手な性格でお引き受けしたのですが、事務局の方とお話ししているときに、いや、スクールカウンセリングのお話も、いや、特別支援教育のお話もとか、子どもの心をどうやって知ればいいのかとか、いろいろなお話があって、これは私ではなかなか全部お話しできないのではないかと、どうしようかなと思っておりました。

数日前に参加者の名簿を拝見しましたら、私よりはるかに経験が豊富な方と思われる方、あるいはまだ教職課程の1年生の学生、さまざまな方がおられるということで、いったいどこらへんに焦点を当ててお話しすればいいのかちょっと迷いました。

あとちょっと予想していたのですが、私の後輩も今日は来て、ますますお話しがしにくくなったのですが、こういうときはあまり策を弄してもしょうがありませんので、原点に帰ってサッカーの“サムライジャパン”のように戦わなくてはいけないと思っています。今日はオランダ戦で、長友君は明治大学の卒業生ですが、彼は教職課程を取っていて、私の授業も取って、とてもまじめに勉強していました。彼を見習って原点に帰ってやるしかないかなと思っております。どうぞよろしくお願いいたします。

原点に帰るということで、私がこの領域に入ったところのことからお話しできればと思います。今日は研究会ということですので、発表は一般向けのお話というよりもかなり突っ込んだお話になると思います。プライベートな情報がかなり含まれております。お手元の資料からはなるべく削除してありますが、パワーポイントで映すところにはいろいろ出てきます。そちらについてはこの場限り、分科会のところでも結構ですが、今日限りということで取扱いにご注意いただければと思います。

## 【「なぜ、この領域で仕事をするのか」という問い】

私がこの道に入ったそもそものきっかけはいまから22～23年前の話です。大学3年生の

ときに「I型糖尿病」と言われる病気の子どもたちのキャンプに参加しました。なぜ参加したか、大きな声では言えないのですが、友だちに誘われて何となく参加しました。いまの大学生諸君が教職課程を取っているときに、中には何となくという方もおられると思いますが、私は彼らを責められないし、不真面目ではないかとは全然言えない立場です。このキャンプは福島で行われ、当時は9泊10日という長丁場の子どもたちの療育キャンプでした。

ここである小学校1年生の男の子の担当になり、その子とずっと一緒にいました。私は当時、子どものことは全然わかっていなくて、そもそも子どもが嫌いでした。教育学部にながら、教育も嫌い、こんな学問は何だとずっと思っていたほうなので、こんなところでお話ししているのも変なのですが、そもそも子どもが嫌い。どうやって接したらいいかわからないということから始まりました。

その1年生の男の子が夜、宿泊施設に戻るときに、沼の近くを通るたびに「直樹、この沼にワニいるかな」と私に聞くのです。私は内心、「いない、いない、絶対いない」と思っていたのですが、一応、教科書とかを読んで、これは共感的に接しなくてはいけないということがありますので、「ああ、いるかもしれないね」と接していました。

しばらくすると、今度は「ワニいるかな。ワニが出てきたら、俺がぶっ飛ばしてやるからね」と言って、「じゃあ、願いますね」と言っていました。これはカウンセリングの観点から言うと、あまりよろしくない対応ということになりますが、そんなことをしていました。

I型糖尿病の話をしていませんでしたが、これは原因不明で、いわゆる成人病の糖尿病と違って、何かウイルスに感染して膵臓からインスリンが出なくなる病気です。0歳で発症する子もいますが、その子たちのキャンプです。帰りは福島からバスで帰りますが、サービスエリアで子どもたちは家族にお土産を買います。子どもたちはそれをとても楽しみにしていました。一方、大人たちはサービスエリアは非常に危険が多いので、安全確保に結構必死でした。私もそれをやっていました。

ところが、私がサービスエリアのお土産売り場に子どもがいないことを確認してバスに戻ったら、バスもいない。バスは子どもの人数だけを確認したらもうとっとと発車してしまって、本当に頭の中が真っ白になりました。何も持たないでサービスエリアに一人取り残されてしまったのですが、そうしたら何とその担当していた1年生の男の子だけが私のことを思い出してくれて、「直樹がいない」とバスの中で叫んでくれた。それでバスは高速道路の本線に入る直前で止まって、迎えに来てくれた人と私は東北自動車道を走ってバスまで戻りました。

それがそもそもの始まりです。あまり人に言えない感じで、ほめられるようなところはないスタートでした。その後、大学院に進み、何となく専門家になってしまった。先生方はどうでしょうか。私は教師になると心に固く誓ってなった方もおられるでしょうし、いろいろな経緯でそうなったという方もおられるのではないかと思います。私はあまり深くは考えずに、何となく専門家の道に入ってしまった。

そうなるとう然痛い目に遭います。大学院に進学しましたが、そこでうまく行かない。何がうまく行かないか。子どもの接し方もそうですが、大学院で強く教えられたことは、私なりの受け止め方ですが、「理論と実践を統合しろ」というようなことで、そういった指導を厳しく受けたように思います。しかし、それがうまくできません。

これからいろいろな事例が出てきますが、心理学にはいろいろな概念があつて、それを当てはめて解釈することは、そんなに難しいことではない。私が教わった教育では、そういうことをしてはいけない。「もっと自分の言葉で語れ、実践の中で自分の心の中に浮かんできた言葉を理論化していけ」ということでした。

ある日、不登校の子のプレイセラピー、遊んで心理療法をするというものですが、それをやっていて、「おまえはこの子に会って何をしているんだ」と問われて、「不登校の子だから登校させるのが目的です」と言ったら、「ばか者」という感じで叱られました。不登校の心理療法で登校させることを目的とすると、あまりうまく行かないことがあつて、そういうことではないことを何か自分で見つけろと、そんな指導を受けました。やはりついて行けなくて、私はそのあとこの道を一回断念しました。先生方はどうですか。一回やめた方はおられますか。

そんなわけで1年間ぐらい子どもにかかわることをやめました。それは自分には向いていないと思ったからです。いまも向いていないと思っています。向いていないし、能力もあまりない、センスがないと強く感じています。それでやめたのですが、大学院の博士課程にまで進学して、途中でやめて他に何ができるかという、できることはほかにあまりない。

だから真剣にタクシーの運転手でもやるかとか、私はトラック野郎が大好きだったので、長距離トラックの運転手でもやるかと思いましたが、そうしたら大学院や学部で指導をしてくださった先生が心配したのでしょう。突然訪ねて来られました。それでいろいろな人を紹介していただいて、札幌市の障害者の施設に就職することになりました。その先生は、そのしばらくあとに亡くなられましたが非常に有名な先生です。そんなことを考えると、才能はないけれど、これはやめたらいかんという感じがします。

皆さん障害者の施設をご覧になったことがあるかどうかわかりませんが、勤めたのは精神障害者の施設です。障害には、身体障害、知的障害、精神障害がありますが、精神障害者の施設は一番予算が少なく、劣悪な環境です。その施設も街の中には作れなくて市街化調整区域に作られていました。見渡す限り人家がないところでした。

そこに統合失調症、精神分裂病といったほうがわかりやすいかもしれませんが、そういう方やアルコール依存症の方、うつ病の方もおられたし、中には覚せい剤をやって入院していたという方もおられました。

そういう方と3年間過ごすことになります。実はこれが私にとって非常に大きな経験で、もう逃げられないところに追い詰められて、そういう方々に向かい合わなくては行けなくなって、必死で何かをやったということです。最果ての地でしたが、そこでの経験が非常に大きくて、ではまたこの領域で何かやってみるかと思ったのが、そこでの3年間です。そんなふうと言うと格好いいのですが、いまでもいろいろな相談が舞い込むと、やは

り毎回逃げ出したい、できれば来てほしくないと思うのですが、まあ仕様がなくてやっているといるところがあります。

## 【子どもの心理療法の中で】

### ○小学生の心理療法から

いくつか事例を紹介します。原点に回帰するとお伝えしましたが、もう20年前のある子どもとかかわったプレイセラピーのケースです。今回、スクールカウンセリングと特別支援教育ということですが、その子の事例を自分でまとめたものがあって、20年ぶりに読み返してみるとなかなかいいところがあって、それで今回取り上げました。

この子は小1の男の子で言語面、社会性の遅れということで大学の相談室に相談に来ました。読み書き、計算はできるが、先生の指示に従えない。お母さんとしては何かおかしい感じがする。言葉と社会性の遅れとはどんなことかという、言葉で気持ちのやりとりをすることができないとか、周りの人が話しかけても反応しないことがあるとか、先生の指示が入らない。学校でときどきパニックを起こして大声でわめいておさまりがつかなくなる。小学校にお勤めの方はここまで聞くと、ああ、もしかしたらと思われるかもしれませんが、いまで言う発達障害の子どものケースかなと思います。

当時は発達障害という言葉は一般に全然使われていなくて、情緒障害とか気の利いた人はMBD (Minimal Brain Damage ; 微細脳損傷) とか言っていました。いまはたぶん発達障害といわれるかだと思います。発達障害に関しては、今日いろいろな方が参加しておられますので少し解説をしたいと思います。

LDは学習障害ですが、これは特定の分野だけできないという子どもたちです。ADHDは注意欠陥多動性障害と言いますが、忘れ物が非常に多いとか、授業中にボーッとしてみまうとか、授業中45分間座ってられない、突然キレてしまうとか、そんな症状があります。それからアスペルガー症候群は空気が読めない。

これらを総称して発達障害と呼んでいて、タイトルに特別支援教育とありましたが、すでに先生方はご存じのとおり、通常学級の中に5%とか6%といった割合でこういう子どもたちがいるのだということで、これからは普通学級の先生も特別支援教育をやらなければいけないということになったわけです。

発達障害に関しては、知的な障害のない発達上の問題とご理解いただければと思います。何を持って発達障害と呼ぶかについては、範囲はいろいろですが、知的な障害がないことが基本的なラインです。通常、就学相談の段階で知的な障害があれば、知的障害児のための特別支援学校という話になるのですが、知的障害がないので、そこでは「そちらに行ってほしい」とはあまり言われません。

実は大学にも発達障害の学生さんがいっぱい入ってきます。知的な障害はなくて、むしろよくできたりすることもあります。いま私は大学で学生相談もやっているのですが、学生相談で非常に問題になっているのは、この発達障害を抱えた学生にどう対応するかとい

うことです。

もう少しわかりやすく発達障害について説明します。トム・クルーズをご存じでしょうか。トム・クルーズは、実は脚本をうまく読むことができないらしい。ご本人もそれを認めていて、たぶんいわゆる読字障害、学習障害の一種でディスレキシアです。

次はご存じの、のび太とジャイアンです。野比のび太、おっとり、のんびり、注意欠陥性障害、ADHDのADのほうです。ジャイアンの本名は剛田武です。なぜジャイアンというか。妹はジャイ子です。ジャイ子のお兄さん、兄だからジャイアンとなっているということです。これを子どもたちに言うと「オーッ、この先生やるな」とか思うかもしれません。これは結構、大学生に受けます。ジャイアンのほうは暴れん坊で、すぐにキレるという多動性障害の特徴がある。

実際私がこれを思いついて書いているのではなくて、注意欠陥多動性障害の研究をしているお医者さんが、ジャイアン・のび太症候群と呼んで本を書いたりしています。のび太もジャイアンも、昔から子どもたちの中にあるようなタイプの子です。

次はビル・ゲイツです。彼は、食事はいつもファーストフードらしい。対人関係は非常に苦手、驚異のデジタル思考でマイクロソフトができたということですが、有名な精神科医が、彼はアスペルガー症候群ではないかと言っています。こんなふうな発達障害の場合は、いわゆる「障害」とはっきりしているタイプではなく、ですから通常学級の中にも当然たくさんそういった児童生徒がいるということになります。

この男の子ですが、私が本人のプレイセラピーを担当することになりました。プレイセラピーでは、先ほどお伝えしたとおり遊びながら心理療法をやります。発達障害と思われるような症状を呈するこの男の子と私が会うことになりましたが、初回はどんなふうだったかという、彼はささやき声で、忍び足で部屋の中を歩いています。本当に静かな子でした。

シルバニアファミリーというのがプレイルームにあって、それで遊び始めます。どんな遊び方をするかという、彼の場合には突然、人形を全部出して家具だけにしてしまいます。生物がいないような状況にしてしまう。不思議な子だなと思って見ていましたが、そのあと彼は街をプレイルームの中につくります。心理屋さんはこんなことをやっているのですが、たぶん一般の人からすると何をやっているのだろうという感じがあるかもしれません。

基本的に子どもと自由に遊んで、その中で表現されていくことを見ていこうということですが、街の中のここに怪獣がいて、ここにA君の家がある。それでここに学校があり、ここに橋がかかっています。このような街をつくります。心理屋さんとしては、ここから何かを読み取らなければいけないわけですが、これを見て、どうでしょうか、何かおわかりになりますか。

多くの方は何かわからないなど。正直なところ私もわからない。わからないけれども私が感じたことは、何か街にしては整然として直線的でこんな街はないなということでした。怪獣はいるけれども、やはり人がいないのは不思議な感じがして、静かな街だなと思いました。

「わからないこと、それが重要だ」と思います。私は大学院で勉強したときに、「おまえは一つ才能がある。物事のわからないところが才能だ」と言われたことがあります。

当時は、ばかにされたのだと思ってカチンと来ていたのですが、そのあと意味がよくわかってきて、やはり容易にわかってはいけないことがあるだろうと思います。理論をいろいろ当てはめていくと、あるいは先ほどの発達障害の障害面を当てはめていくと、わかったような感じになるということがあるのですが、たぶん心の読みとき方という点から言うと簡単にわかってはいけないのだろうと思っています。

しばらくして彼は違った街をつくります。前に作った街と違うのは、ここに来てぐるっと回っているところです。さっきは何か直線的な街だったのですが、このようにカーブを描いているようになっています。彼はたぶん人というものがなかなか理解しがたいというところがあったのではないかと思います。直線的で、規則的で正しいものを彼は理解できるけれども、人間はやはりなかなか理解しづらいものだったのではないかと思います。

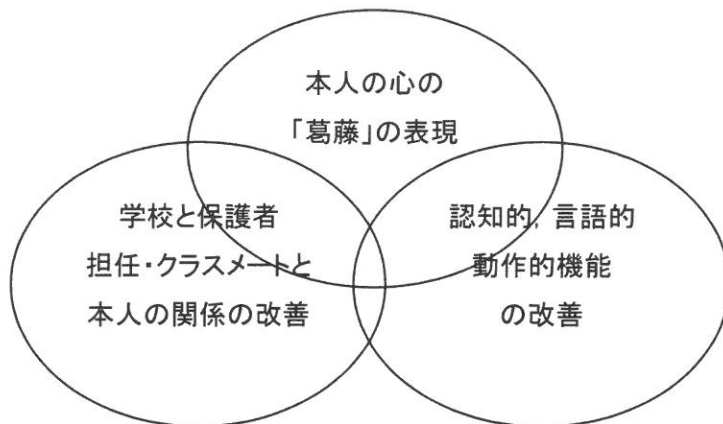
彼の生育歴をお伝えするのを忘れましたが、彼は1歳から4歳半まで海外で生活しています。そこで集団行動に乗れなくて、ちょっとおかしいのではないかとと言われて、専門医を受診しています。お母さんはノイローゼ気味になってしまって、帰国後、就学相談に行ったら、やはりこの子は知的に問題があるからそちらの学校に行きなさいと言われて、お母さんはますますショックを受けてしまう。

彼が幼稚園に行ったときに印象的なエピソードがあって、幼稚園で彼と遊ぶために友だちがワーンと集まってくる。そうすると彼は、「人が集まってくる」と非常に驚いた。彼にとっては人とか不規則なものは容易に理解できないところがあったのかなと思いますが、このようにこの街はちょっと曲線が入ってきて、彼の中で何か変化が起きたのかなと、そんなふうに読みだすわけです。こういった解釈は、どうしてそう思うのか、それが正しいのかと言われると全然根拠はなくて、私が直観的に感じたことです。そういったことを手繰り寄せてやっていきます。

これは最後のほうにつくったものですが、ここに木があって、柵があって、バクが1頭佇んでいます。彼はとても満足したような感じでこれをつくります。私がかから感じたことは、やはり森というのは不規則な世界で、整然としていない世界だろうと思います。このバクというのは、私なりの理解では、彼なのではないかと思っているのですが、彼としては森の中にこれから入っていくみたいなことを、このプレイルームの街の中で表現していったのかなと思います。

このあたりで彼の学校での適応が非常によくようになってきていて、このあと私とはゲームをしたりするようになっていきますが、学校での適応がよくなったので、そこで治療としては終結しました。

心理屋さん、スクールカウンセラーのやることの一番大きなところは、本人の心の葛藤の表現、葛藤とは曖昧な言葉ですが、そういったところにあるのかなと思います(図1)。



【図1】 事例から見えてくる3つの要素

それと大事なことは、私は本人と会っていたのですが、もう一人の担当者がお母さんと会っていることです。そこでやっていたことは、学校と保護者とか、担任・クラスメートと本人の関係の改善です。学校の先生は、何か変わった子だと思っていて、そのことで非常に関係が悪くなっていたので、その関係の改善をお母さんの担当者はやっていました。

もう一つ最後の認知的・言語的・動作的機能の改善ですが、実はこの治療でここはやっていない。たぶん特別支援教育というのは、このあたりのことを中心にやるのかなと私は思っています。彼との治療は14回で終わっていますが、本当はもっと長く続くべきだったと理解しています。

なぜ心理療法が続かなかったかという、ここをやっていないからだと思えます。なぜできなかったかという、私にこういう知識、経験がなかったからです。当時の記録を見ると、いろいろなところにヒントがあって、彼は遊びの中でレゴが組み立てられない。指先がうまく動かないのか、あるいは指のつまむ力が弱いのか、あるいは目で指の先を見て動かし方がよくできないのか、いろいろな可能性があるのですが、そこに関して私は全然経験がなかったので取り上げていません。ですから彼のほうから、このお兄さんとやるのはここまでだと見切られて、それで早く終わったのだろうといまでは理解しています。

たぶん学校現場で専門職にいま求められているのは、この三つ(図1参照)なのかなと思っています。スクールカウンセラーは「本人の心の葛藤の表現」のあたりを中心にやりますが、当然、「認知的、言語的、動作的機能の改善」もやらなければいけない。私は特別支援教育の相談員もしていますが、たぶんそれは「認知的、言語的、動作的機能の改善」をやらなければいけない。もちろん「本人の心の葛藤の表現」もやらなければいけないのですが。

この三つをうまくバランス取ってやるのがいまの学校で求められていることなのかなと思っています。ただ特別支援教育の専門性と心理の専門性は、やはりかなり違います。このあたりの統合が非常に難しいなと思っています。

## ○中学生の心理療法から

次は中学生の男の子B君との面接を紹介したいと思います。この子は何で相談に来たか

というと、「ファミコン以外しない、親の財布から金を盗む、爪を噛む、親が注意しても反抗しないで黙っている、ときには泣いたりする」ということで来ました。

お母さんに連れて来られて、本人と私は会いましたが、こんなふうに連れて来られて、「カウンセラーの人に自分の気持ちを話してごらん」と言われて話すかということ、中学生の先生方はよくおわかりだと思いますが、特に男の子はこんなふうに連れて来られてカウンセラーに自分の気持ちを話さない。自分を語らない子どもとの面接には結構苦労します。

この事例では両親が共働きで結構忙しい。『共働きの子育て』という本があるらしくて、お母さんはそれを教科書にして子育てをしたと言っています。この子は小さいころから非常にマイペースで、保育園でもマイペース過ぎると言われて、問題を指摘されています。唯一おじいちゃんだけが彼のマイペースを理解してくれるとても重要な人でしたが、おじいちゃんは亡くなってしまいます。

彼を大事にしてくれる人がいなくなって、彼はますますマイペースになっていってしまいます。小学校4年生のときに担任が替わりました。そうするとこの子のマイペースなのはおかしいと言いはじめ、そこで問題児扱いされるようになり、中1のときに来たということです。

この子はあまり話しをしてくれなかったのですが、面接室に入って、「この時間を自由に使っていいよ」と言ったら、「待合室にあったマンガが読みたい」とこの時ははっきり言ってマンガを取りに行きます。読んだマンガがあだち充の『ラフ』ですが、読んだことがある方はいますか？おもしろいのでぜひ一度読んでいただきたいのですが、私が面接室にいるにもかかわらず、これをひたすら読んでいました。

いろいろお話をしようと思ってこちらから話しかけるのですが、全然その話には乗ってこないで、ひたすら読んでいます。12巻まであるので、12巻になったら終わるだろうと思って待っていたのですが、12巻まで読んだら、また1巻を持って来て、2回も読んでしまいます。こんなふうに気持ちに接するのがなかなか難しかった子です。

仕様がなくて、ちょっと冒険だったのですが、この子はファミコンが好きなので、「じゃあ、ファミコンをやってみる？」と言って、当時、相談室にファミコンがあったので、ファミコンに誘います。そんなふうにして今度はファミコンをするようになったのですが、やはり私をまったく無視して今度はずっとファミコンをしています。

やったソフトは「スーパー三国志Ⅱ」とか、「ファイナルファンタジーⅣ」です。この子のゲームの中での攻め方が非常におもしろくて、彼は非常に知略家、戦略家です。綿密に戦略を立てて、絶対負けないようにして攻めていくという攻め方をします。たまに不利になってくるとどうするかというと、あっさり退却してしまう。そんなファミコンの遊び方をしていました。もちろんファミコンですから、ただ単に遊んでいるのだという見方もあるのですが、やはりそこに彼の姿が表れているのではないかと取ります。

お母さんはほかの相談員が会っていたのですが、当時エピソードがあって、おばあちゃんが階段から落ちてしまう事件がありました。お母さんは慌ててしまったのですが、彼は非常に冷静に「救急車を呼んで」という指示をして、てきぱきと行動したというエピソードがあります。お母さんは、彼が「ファミコンしかしないとか、だらしない子どもだ、何



とかしたい」と思って連れてきたわけですが、実際彼のほうはそんなにしっかりしていないかということ、実はそうではなくて、どうもこれは母子の関係性に何か調整が必要なのかと思われるケースです。

そのうちにプレイルームで遊ぶゲームソフトの種類が変化し始めます。「ストリートファイターⅡ」や「スーパーマリオカート」といったソフトです。

「スーパー三国志Ⅱ」や「ファイナルファンタジーⅣ」は戦略型で、「ストリートファイターⅡ」や「スーパーマリオカート」は何が違うかということと直接対決型のソフトです。間接的だけれども、これがかかわり合いができるようになってきます。子どもの遊び方は、その子どものあり方が反映してくるのかなとも思っています。遊び方に限らず何をするかということに子どもの何かが表現されてくるのではないかと思っています。

その後、いろいろあったのですが、ある日ファミコンをしないでウォークマンを聴いていることがありました。「何を聴いているの？」と言ったら彼は聴かせてくれました。爆風スランプというバンドの「涙<sup>2</sup>」を聴いていました。歌詞が渋い。「やがて二人をちぎる別れ」とか、「愛の意味を知る」とか、「けれども二人は別れる定め」とか出てきて、最後は「いつか強く、強くなるのだから」とか、こんなせりふが入っています。

私はこの曲を聴いたときにとっても衝撃を受けました。何かマイペースな男の子が聴いている曲にしてはちょっと渋すぎる曲だと思って衝撃を受けて、早速このCDを借りに行きました。また歌詞が何か意味深です。誰と誰が別れるのか、誰の愛なのか、強くなるのは誰かとか考えたりもしました。

ここから先は彼がどういうふうな子なのか考える段になりますが、「理論と実際を結びつけろ」という視点から、彼の表現からどういうことが起きているかを構造化してとらえることをちょっとしてみたいと思います。

この母子が直面したテーマは、簡単には子離れと親離れだと思います(図2)。「ラフ」をよく見ると、実は大和家と二ノ宮家は昔からの和菓子屋ですが憎しみ合っています。主人公の大和圭介と二ノ宮亜美は、いがみ合っている和菓子屋さんの跡取りの子どもたちで、この2人がある学校で同じ部に入って、だんだん惹かれあってしまう。ここには愛憎が表現されているかと思えます。

最後の「涙<sup>2</sup>」ですが、歌詞にあるとおり愛と別れの歌です。たぶん彼が意識してこういうことをしているわけではないとは思いますが、無意識に選択している遊び方とかメディアとかに彼の生きている背景が出てくるのかなとも思っています。彼はあまり話してくれなかったので、こういったところから彼のことを推測したりしていました。

そのあと彼はすっかり成長して、お母さんから独立していきます。そして「床屋事件」というのが起こります。これは、彼が床屋の帰りに友だちの家に行ってしまうまで帰ってこないという事件です。お母さんは、あまりに激怒して寝込んでしまい、相談室に相談にも来られないほどになりましたが、一方の彼は飄々としていて、「眠いのに寝ているのを起こされる僕の気持ちができるだろう」と寝込んでいるお母さんに言ったりしています。

### 母子の直面したテーマ

母の執着

子の自立

v s

### ラフに表現されているテーマ

大和家と二ノ宮家  
の間の憎しみ

v s

次第に惹かれ合う  
大和圭介と二ノ宮亜美

### 涙<sup>2</sup>に表現されているテーマ

愛

v s

別れ

【図2】 事例から見えてくる構造

先ほどの「涙<sup>2</sup>」の曲ですが、こんなエピソードもありました。彼がウォークマンでその曲を聴いていた時に、お母さんも何を聴いているのかなと思って見ていました。すると、彼がやおらウォークマンのイヤホンの片方をお母さんの耳にねじ込んで聴かせました。聴かせたら、お母さんはたぶん何か衝撃を受けたのだと思いますが、そこで泣き出してしまった。たぶん先ほどのこういうような構造化に何か関連するからそんなことが起きたのかなと思います。その後、彼はすっかりしっかりしてきて、自分で勉強をするようになって、某有名私立高校に合格しています。

「子どもの心の読みとき方」というタイトルでお話させているのですが、いまお話ししたとおり、やはり子どもの行動をじっくり見ていくと、それなりにヒントがあって、その子の何かを表していることがあり、周りの人がそれを理解していくことが大事なのかと思っています。学校現場ではそういった時間的な余裕がなかなかないわけですが、カウンセラーは一对一で会って、時間を取ってじっくり話をするというのは、やはりこういう細かいところを理解していこうとするのがその専門性なのかなと思います。

### 【描かれた絵から見えてくること】

#### ○自分を語れない子どもの面接

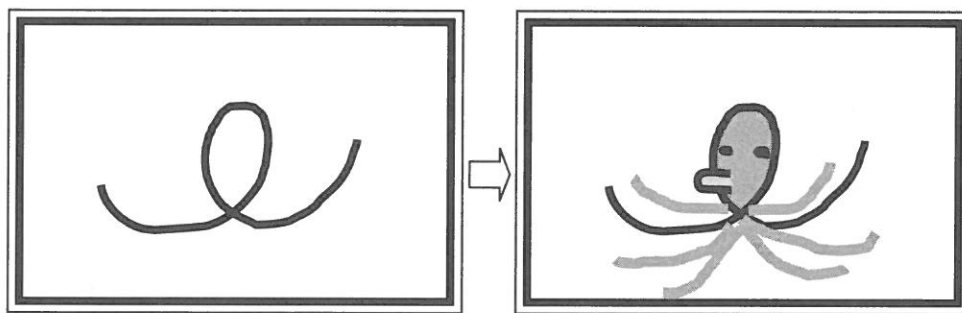
時間もそんなに残りがありませんが、あといくつか事例を紹介したいと思います。次の事例のC君も男の子ですが、自分を語ってくれない。この子は学校には来られないことはないのですが、教室には全然入れない。カウンセリングルームにだけ来られるという状況でした。

私はそのときスクールカウンセラーをしていてこの男の子と会いました。面接をするのですが、やはり話してくれない。「うん」とか「いいえ」とか「別に」とか、中学生の男の

子はそういう話し方をする子がいます。カウンセリングというのは、「話」ですることなので、「話」をしてくれないと話にならないという面があるわけで、困りました。

カウンセリングルームにファミコンがあればやったのですが、なかったのですが、仕様がなくて「じゃあ、絵でも描いてみる？」と言って、絵に誘いました。スクイグルという技法があります。どんなものかちょっと説明します。

スクイグルとはなぐり描きのことです。画用紙とサインペンと色鉛筆かクレヨンがあれば簡単にできます。やり方は、相手が描いたなぐり書きをもとに絵を構成するというものです。たとえば私がこのような線を適当に描きます（図3左側）。画用紙があつたら、このような枠をつけていって、ここから出てはいけないという決まりになっています。おまじないみたいなものです。これを描いて、相手の子に渡します。相手の子はこれを見て、この線を使って絵を描きます。たとえばタコに見えると、タコを描いて色をつけます（図3右側）。こんなことを繰り返していくという方法です。



【図3】 スクイグルの例

これをやってみようかということでやってみました。この子は、一人っ子で受験勉強をすごく激しくやった子で、入学して5月ぐらいに学校に来られなくなってしまった。受験勉強でちょっと疲れてしまったのかなというところがあるような子です。彼が描いた絵をお見せしたいと思います。

初回の絵について、「何を描いたの？」と言ったら、「昔、家族で旅行に行ったときに道路の脇に生えていた毒キノコ」と言います。別に彼は憎しみを込めて毒キノコを描いたわけではありません。これはやってみるとわかるのですが、先ほどの線からさっきの変なタコが出てきましたが、自由に連想してもなかなか描けない。あることを思いつくとなら以外描けない。これはやってみると結構おもしろいです。

毒キノコを描いたことにはたぶん何か必然性があつたのだらうと考えます。タイトルが、家族で旅行に行ったときに毒キノコです。ハッピーな家族なのだらうかという感じがちょっとします。実際このお父さんとお母さんの間にちょっといろいろ問題がありました。それがどう影響しているのかわかりませんが、何か彼の不登校に影響を与えているのかもしれないという気がします。

何回目かの面接のときに描いたのが、このブラックホールです。ブラックホールが実際にどんなものなのか、なかなかよくわからないのですが、ブラックホールは重力が無限大になっていくので、光も脱出できない。では吸い込むだけかかというと、そうではなくて『ニ

ュートン』とかを見ると、このように上下と言ったらいいのかわかりませんが、エネルギーが出ている。吸い込んで、出している。ブラックホールというのは、単純に考えれば、「すべての終わり」であり、「すべての始まり」であるわけです。絵を描いているうちにこのようになりました。

プレイセラピーもそうですが、子どもと心理療法をしていると何かがいったん全部壊れて、何かがまたできてくるという遊びとかテーマがよく出てきます。最初に紹介した男の子に、プレイセラピーの中で私は何回も殺されています。斬りつけられたり、ピストルを撃たれたりして死んでいます。一回、「許してください」と頼んだのですが、「許しません」とか言って斬りつけられたりしています。そんなことを結構繰り返します。

そんなところからどんなふうにかえるかという、その子の中のそれまでの何かが一回壊れて、新しいものをつくらないと、いまぶつかっている問題を乗り越えられないという感じで理解します。ただ、彼もこの時点で何かが再生してくるみたいなことがあって、こういう絵を描いたのかなと理解します。

よく客観性が問われるのですが、もちろんこれが客観的かどうかという、全然客観的ではない。「客観科学が客観的か」というのは、大学の先生はご存じだと思いますが、必ずしもそうではありません。私は統計をよく使うのですが、今日お越しの方の平均年齢を計算しました。私は43歳ですが、平均もだいたい43歳ぐらいになります。見渡してみると、では私と同じぐらいの人がいるかという、そうではない。そんな感じで統計というのは数値を変えるともともとと全然違ったことになってきてしまう。客観性というのが、もともと客観的であるかというのは、大きな問題です。

そして彼はブラックホールを描きます。しばらくして描いた絵が天狗です。天狗というのは妖怪なのかよくわかりませんが、この世のものではない。子どもの心理療法をやっていると、やはりこの世のものでないものが結構出てきます。これは何かというのはよくわからないのだけれども、その子の内面のかなり深いところが表れているのかなと理解します。

彼が最後の日に描いたのは縄跳びです。小さい男の子と大きい男の人がいます。私は単純に解釈して、小さい男の子が彼で、大きい男の人は私と一緒に縄跳びをして遊んでいるのだと思いました。あまり話はしなかったのですが、たぶん内面的には何か交流があって、一緒に何か作業をしているのだというのが、このように表れたのかなと解釈していきます。

こんな解釈は全然当てにならないと思われてもいいのですが、実はこのあと彼はしばらくして「今日から教室に行きます」と言って、登校し始めました。以降、一回も欠席しないで通いました。今回は絵を使ったのですが、子どもが何か問題を抱えているときに、それが何か表現できるとたぶんいいのだらうと思います。彼も何か表現して、それで学校に行くようになった。

この絵を描いてからしばらくして、それまで「うん」とか「いいえ」とか「別に」とか、そういうことしか話さなかった彼が、面接で突然ワッと話し始めました。「僕がなぜ話さなかったか」という理由について延々と話し始めるということがありました。やはり彼の中でも何か表現したいけれどもできない、何か表現する言葉が見つからないという状況が

不登校ということに結びついていったのか。それで何か表現するきっかけができて、表現できて、何かを乗り越えていったのかなと思います。

### ○会えない子どもとのかかわり

もう一つ、これも中2の不登校のケースです。同じ学校のスクールカウンセラーとしてあった事例です。このD君の場合にはほとんど本人と会えない。なぜ会えないかという、人と会うのが怖いからです。だから学校に全然来られない。人と会うのが怖いどころか、電話にも出られない。担任の先生が電話をかけても全然出られないという状況でした。

家にいるわけですが、会えないからどうしたらいいか。いろいろ紆余曲折があって、初めは手紙を出してみました。彼が『ハリー・ポッター』が好きだという情報を聞きつけて『ハリー・ポッター』のレターセットを購入して出したりとか、次はどうもコミックスの『ONE PIECE』が好きらしいということで、『ONE PIECE』のレターセットを買って、それから『ONE PIECE』を私は26巻まで買って、それを読んで備えて彼に手紙を出したりするわけですが、そうしているうちに電話に出てくれるようになります。

電話に出ていると話をしている、電話だとなかなかやりにくいので、彼は絵が好きだというのもわかったので、「では絵でも描いてみる？」と言って、さっきのスクイグルをやります。会えないので、こちらが描いて郵便で送ります。そうすると彼も描いて送ってきます。そんなふうにしてやりました。

彼が最初のころに描いた絵です。先ほどの絵と全然違うのは、私が描いた線を結構無視してラインをつけて描いている。しかもタイトルが「上昇しすぎていたマンダラの帰宅」と、意味がよくわからない。ユング心理学をちょっと勉強したことがある人は「マンダラ」がユング心理学ではとても重要な言葉だということがわかると思いますが、これも心の深いところのイメージを表す言葉です。たぶんこれは彼にとって非常に重要だったと思います。

先ほどの彼の絵と比べて、明らかに絵の質も違います。人と会えない。彼のこのあとの人生は大変だろうと思うのですが、やはりそういったことが絵に表れてくるのかなと思います。

次の絵は「ワシの心臓」、強烈です。真っ赤で、しかも心臓です。ギョッとするような絵ですが、さっきと違うのは、一応線に沿って描いているということです。たぶん私のほうと何か波長を合わせられるようになってきたというか、距離が少し縮まったのだと思います。ただ、表現はギョッとするような絵です。先ほど言ったとおりに彼が抱えている問題はたぶんすごく大変なことです。

次に私は丸を描いて、丸を描いたから柔らかい絵が返ってくるかなと思ったら、ギョッとするような「水星人」という、何だ、これはというような絵が返ってきます。一応線は使ってくれています。しかし出てくる絵がすごく強烈です。彼が返してくると、今度は彼からなぐり描きのラインが返ってくるので、それに合わせて私が絵を描いて送ります。彼とのやりとりしているときは、これに応える絵を描かなければいけないので、とても大変でした。

これは最後に描いた絵です。これも強烈で、何を描いているのかよくわからないのだけれども、一応線は使ってくれている。「親密な夜空の下、溶け始めた左腕を拡大鏡で見られるカニとアメンボ」で、これがカニです。拡大鏡があつて、ここにアメンボがいるわけですが、このカニの左腕が溶けてしまっている。ギョッとする以外にない。ただこんなふうに表示して行って、彼はだんだん外に出られるようになってきます。コンビニに行ったり、本屋さんに行ったりしている。少しずつ外に行くようなことをしています。だから表現できているということは、何かしら意味はあるのだと思います。

彼は、中学はほぼ不登校だったのですが、一応、卒業証書をもらって、その卒業式にも行けなかったわけですが、都立高校を受験します。大丈夫かなと思っていたのですが、面接試験を受け、某都立高校に合格しました。そのあと行ったかどうかちょっとわかりません。卒業してほかの学校に行ってしまったので、もうスクールカウンセラーとしての仕事は終わりです。ただ、いずれこの先の人生も彼はかなり大変だろうなどは思っています。

彼が卒業するころに私に絵をプレゼントしてくれました。これは金の額縁にちゃんと入って送られてきました。タイトルは「朱雀と踊る道化」で、意味もよくわからないのですが、朱雀はこのあたりにいます。道化はここで、逆さまで回転しています。彼の世界はやはりかなり変わっているのですが、パッと見、これまで見た絵の中で一応ホッとします。この絵はきれいだなということで私の研究室に飾ってあります。さすがに「水星人」は飾れないなと思いますが、これは飾れる。やはりそれなりに絵を描いてきた何か意味があったということなのかなと思います。

### 【子どもの表現の持つストーリー性】

後半は絵でしたが、表現される内容にはやはりストーリー性がある。これは絵ではなくて問題行動でもそうだと思うのですが、それにも何か内容にストーリー性があるだろう、必ず背景があつて、展開があつてということがあつたらうと思います。

学校の先生、あるいは専門職の方は、表現されているものの背景にある何かストーリー性を読み取っていくことが大事なのだろうと思います。見かけは問題行動なので、とんでもないことをする生徒はいるわけですが、その背後に何かしらあるはずだと思います。これは絵との比較ですが、「水星人」とか「腕が溶けてしまっているカニ」の絵を描いているような子も、背景にはきっと何かがあつて、それをくみ取っていくことが大事なのかと思います。

やはり抱えている問題により表現される内容に違いが出てくる。先ほど絵が全然違ったのがおわかりいただけだと思いますが、学校での問題行動も生徒によって違います。生徒の抱えている問題によって表現されてくる内容は違うのかなと思います。

いろいろ問題を抱えている、あるいは問題にぶつかっている子は、自分の心の中にある汚いもの、怖いもの、未知のものとか、何かそういうことを表現する傾向があつて、これを表現することは結構大事だと思います。相談室、面接室の中では絵とかそんなかたちで出てきますけれども、実際の問題行動で窓ガラスを割ってしまったりするのは、その子の

中に何か制御できないものがある。その表現が窓ガラスを割ってしまうとか、そんなふうに出てくるので、そちらのほうを理解することが大事なかなと思います。

事例の背後にあったことですが、C君の事例は、実は担任教師と本人・保護者、担任教師とスクールカウンセラーの関係がよかった。これが彼が登校したことにたぶん効いていると思います。逆にD君の事例はちょっとぎくしゃくしてしまいました。なぜかという、担任の先生は非常にいい先生で、彼のことを心配して電話をかけてくれます。しかし、本人は全然出てくれない。それでもめげずに手紙を書いていたのですが、だけど返事も返さない、彼は返せない。担任の先生もだんだん嫌になってきてしまった。私のところに来て、「やっぱり不登校は甘えですから」と言うので、私もちょっとカチンと来て、結局このあたりがうまくいかなかった。

このことから連携がとても大事だなと思いますが、いまお話ししてきたとおり、いわゆるカウンセラーの専門性と学校の先生の専門性、あるいは最近導入された特別支援教育の専門性は全然違いますから理解するのが非常に難しいと思います。そこで結構、齟齬が生じてしまうことが多いのかなと思います。

### 【子どもの心の読みとき方】

最後のスライドですが、「子どもの心の読みとき方」とあります。最初の原点に回帰すると、なぜ子どもと向き合うのか。私の場合には、いろいろお世話になった先生方を裏切るわけにはいかないというのがあって、才能はないのだけれども、ない才能を振り絞ってやらないとまずいかなと思って向き合っています。

それがいいのかどうかちょっとわかりませんが、先生方はどうして先生をやっているのか。たぶんこのあたりが子ども心を読みとくときに、やはりかかわってくるのではないかなと思います。何で子どもとかわらなければいけないのか、なぜ先生をやっているのか、子どもの何を見たいのかということです。これは専門性の違いにしてもそうです。カウンセラーはカウンセラーなりに、なぜカウンセラーになったのかというのがあるわけです。子どもの向き合い方もそれで決まってくる。特別支援教育もそういうことがあるわけです。

それと、子どもを理解しようとするこの持つ意味をよく考えます。先ほど言ったとおり問題行動はやはり何かの表現です。その何かを理解しない限り改善はないと思っています。ただ何かというのは容易に理解できるものではないケースが多い。先ほど紹介した事例もそうですが、全部がわかっているわけではない。ただ、これは私の向き合い方のスタンスですが、何とか理解し続けようとしています。私はわからないのが特技だということもあり、わからないなりに、ああかな、こうかなと知恵を絞って考え続けることに意味があるのかなと思っています。

考え続けるだけで何か意味があるのかと思われる方もおられると思いますが、実は理解しようとすることは、すでにもう問題への働きかけになっていると思います。理解しようとする先生の生徒へのスタンスはそうでない先生のスタンスとはやはり違うわけです。だから問題に微妙に影響を与えてきます。子どもの問題行動に対応する先生がだれかによっ

て、その後の問題行動の収束の仕方も違ってくるだろうと思います。だから理解しようとするのが、何か問題にいい影響を与えてきて、その問題の解決なり収束に影響するのかなと思います。

最後に、これは一般の人からよく言われることで、不登校などのお母さんの相談に乗ると必ず出てくるのですが、「何でうちの子は不登校になったのでしょうか。原因がわかりません。先生、原因を教えてください。原因がわかれば対処できます」と聞かれることがあります。

ところが私も原因はよくわからないので、そう言われると困ってしまうのですが、これはほかの相談でもそうです。一般の方からすると、何か心の問題が起きるといことは、何か原因があるのではないかということです。

もちろんそう考えてもいいのですが、これまで子ども達と会ってきた経験からすると、理論を当てはめて、これが原因だろうと言うのは簡単です。無意識の葛藤がこうで、抑圧がこうでみたいに話をするのはそんなに難しくないのですが、逆にずっと続けていて思うのは、こういうふうに発想すること自体が問題の解決を遅らせるということです。

何か原因があって、それでいまのことが起きていると周りが見ることと、本当に起きていることは、たぶん違うことなのに、そんなふうに思ってしまうことで、ほかの可能性を捨てることをやめてしまう。そういうことが起きるような気がします。ですから先生方で問題行動が起きて、その原因がわかればいいんだけどと思ったときは、その発想自体が可能性をせばめていることもあるかなと思います。

むしろ何をしたらいいかというのは、何が起きているか理解することだと思えます。たぶんそれは問題につながっていくので、生徒へのかかわり方に影響を与えていって、いい方向に行くことが多いのではないかと思います。

いろいろお伝えしましたが、このように考えることはなかなか日々お忙しい先生方は時間が取れないと思います。カウンセラーがいる学校では、ぜひカウンセラーに「こういう問題が起きているんだけど、どうしたらいいでしょうか」みたいな相談をしていただきたいと思えます。相談することで、やはり先生方も一呼吸置くことができたりすることがあると思えますし、何か理解しようとする事自体がいい方向に行くと思えます。

特別支援教育の場合もそうですが、突然キレる子がいてどうしたらいいんでしょうかと私もよく聞かれますが、私もよくわからないので、「じゃあ、ちょっと見てみます」と言ってその子と一緒に遊んで、蹴られたり、かじられたりしますが、そういうふうに行っていると、ああ、この子はこういうときにキレるんだなということがだんだんわかってきます。わかってくると、その子と付き合えるようになってきます。ですからあまり特効薬ばかりを探そうと考えたらちょっと危ないかな、とっていただけたらいいかなと思います。

今日はいろいろわかりにくいところもあったかもしれませんが、このあとの分科会がうまく行くような何かよいヒントになれば幸いです。ご清聴、どうもありがとうございました。(拍手)



**司会** 伊藤先生、どうもありがとうございました。伊藤先生は意外とゲーマーなんですね。聴いていてちょっと思いましたが、個人的にはスクイグルという表現方法に私はとても興味がありました。いろいろとすぐ現場で実践できるとは思いませんが、参考にさせていただきたいと思いました。伊藤先生にもう一度盛大な拍手をよろしく願いいたします。

(拍手)

ではこのあと分科会になります。お手元の次第にあるとおり、三つのテーマに沿って分科会を実施いたします。会場はこのリバティタワーの13階になります。この階にはエレベーターがありませんので、エスカレーターで3階に上がっていただいて、そこからエレベーターに乗って13階となります。

テーマの「特別支援教育」、それから「気持ちを語るとは」の教室につきましては13階に上がって、エレベーターを降りて左手になります。それから「スクールカウンセラーと教職員との連携」についてはエレベーターを降りて右手の教室になりますので、場所を間違えないようにしてください。お手元の資料には15分からと書いてありますが、いまはほぼ20分ですので、16時30分から分科会を始めさせていただきたいと思います。それまでに各教室にご移動をお願いいたします。それが終わりましたら、またこの場所にお戻りください。

ではここでいったん全体会を閉じさせていただきます。

## 分科会より報告

司会(江藤) 「特別支援教育」、「気持ちを語るとは」、「スクールカウンセラーと教職員との連携」の順番で報告していきます。では大坪先生、お願いします。

### 第一分科会「特別支援教育」より報告

大坪 第一分科会の「特別支援教育」の報告をさせていただきます富士見中学・高等学校の大坪です。よろしくお願いします。

高橋先生も含めて11名というこじんまりとした会でしたが、まず最初に皆さんから一言ずつ自己紹介をいただきながら、障害者の方とのかかわりの経験談とか、そのような話をいろいろとしていただいて、中にはいま学生さんで支援学級の補助員としてボランティアに行っている方、あるいは学級支援員の方もいらっやって、具体的なお話を聴くこともできました。

その後、特別支援教育ということですが、不登校もその部分と少しかかわってくるのではないかということで不登校の話になり、小学校までではいろいろな特別支援の対応は充実しているんだけど、中学校になると教科担任制になってしまって、そういうシステムがなかなか確立されていないところから、小学校のときには不登校は顕在化しないのだけれども、少しずつ芽が出てきて、そして中学校に入ってくると不登校が顕在化し、夏休み以降増加してくると状況がある。そういうときに必要になってくるのが、カウンセラーとのかかわりだという話になって、カウンセラーとのかかわりはほかの分科会のテーマでしたが、そちらのほうに話が逸れて、そのへんの話を少ししてからもう一度話が元に戻りました。

特別支援教育と不登校というところを考えたときに、障害を持った児童ないし生徒が不登校になる場合に、やはり自分の障害と健常者との壁とか、そういったところから不登校になっていく場合もあるのではないかと私が質問したのですが、そこで高橋先生の奥様が、実は特別支援の専門家でいらっやって、本校の卒業生で今回参加されていたのですが、最後に次のようなお話をいただきました。

やはりその障害者自身の問題もあるのだけれども、その障害者がそういう気持ちを持ってしまうのは、障害者を取り込む周りの環境に大きく左右される。他がどう見るかということが、結局その障害を持った子たちがどう感じるかということになっていくので、やはりみんな違って当然で、みんながみんなそれぞれ違うのだということを、もう少し大人がいろいろなところを見ながらコーディネートしていかなければいけない。各学校にコーディネーターとかもいるだろうけれども、そのコーディネーターが中心になって、障害者との壁ができないような環境づくりをしていくのが重要なのではないか、というお話でした。

時間が少し過ぎたわけですが、一応そのようなかたちで話が盛り上がったところで終わったというところでは。以上簡単ですが、第一分科会の報告でした。(拍手)